Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2006.8
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.34

CONTENTS

・ マリポサ・コートハウス(裁判所)と偶然の時刻
・ ヨセミテ雑感
　～祖父・吉田博との思い出とアンセル・アダムス～
・ 築地仁氏講演会
　～写真を撮ること・見ること・つくること～
・ デジタルコンタクトプリントの実験
・ ゾーンシステム研究会定例会日誌
・ インフォメーション

名古屋ボストン美術館アンセル・アダムス展にて（2006/03/25）

マリポサ・コートハウス(裁判所)と偶然の時刻

中島秀雄

国府田農場を後に、我々はマリポサの街に向けて東に走った。マーセドの街から 140 号線のヨセミテロードに入ると車は少なく、運転はずっと楽になる。周囲の光景も黄金色の牧草地帯に変わり、一本道をしばらく進むとマリポサの街に出た。

鉱山の街として栄えた**マリポサ**は、ヨセミテ観光の宿泊地として現在もにぎわっている。また、この先公園まで街はなく、ドライバーの休息や車の給油地にもなっている。街道沿いには土産物店やホテルが連なり、周囲には住宅、学校、教会、そして、裁判所もある。

私はこの街が好きだ。日本を出発し、ほぼ一日かけてこの街に到着する。白、グレー、茶色を基調とした街の色合いが周囲の自然と調和し、長旅の緊張から自分を取り戻すことができる街のように感じている。

我々の目的は**マリポサ裁判所**を見学することだった。裁判所にいったいどんな魅力があるのか変に思う人もいたかもしれない。

アンセルは **1934 年、マリポサ裁判所の時計台を撮影**している。すでに 32 才の彼は、バージニアと共にサンフランシスコの自宅からヨセミテ公園にあるベストスタジオの隣に生活の場を移し、ベストスタジオの経営を手伝い、また、シエラクラブの役員としてガイドの仕事もこなしていた。しかし、サンフランシスコでスタジオを開いた関係で、ヨセミテとサンフランシスコはしばしば行き来していたようだ。そんなときに**マリポサ**に立ち寄り、**裁判所の時計台**を撮影したと思われる。

真っ白に塗られた外壁、ダブルハングの窓、三角の屋根に時計台はアメリカでよく見るコロニアルスタイルの建築で、学校の図書館か街のホールのようにも見える。周囲に柵はなく、建物に近づくこともできるし中に入ることも出来る。説明パネルには、カリフォルニアの東にある現在も使われている最も古い裁判所で、正面は当時のまま内部は改装してあると書かれている。正面の壁には **1854 年**に建てられたと大きな文字が刻まれている。

アダムス作品のコピー

時計はイギリス製で、その上の鐘の重さは 100 キロあり、一時間ごとに鳴る。よく見ると、時計は文字盤が**ローマ数字**になっていて、以前から私はこのローマ数字に強い興味を持っていた。

この頃のアンセルはゾーンシステムの研究段階で、ゾーンの数値はこの時計台の数値をヒントにしたものだろうと想像している。この話は以前の会報に書いた。

私達は、アンセルが撮影した**裁判所の建物の前に整列して記念写真を撮った**。私はカメラを三脚につけ、デジタルカメラのセルフタイマーをセットして 2 枚撮影した。私はこのときの時刻など全く頭に無かった。

日本に帰り、例会の帰国報告用にデジタル画像を整理した。マリポサ裁判所の説明にはアンセルが写した裁判所の写真があると分かりやすいと思い、本のページをコピーした。**1934 年**にアン

時計部拡大写真

セルが撮影した時計台の時刻は**午後 5 時 43 分**をさしていた。私は、裁判所の前で撮影した**我々の写真**を再び眺め、時計台の時刻を見た。**何と!! 短針、長針の位置が、アンセルが写した時計台の針と重なる**ことに気がついた。確認のためルーペでのぞいたところ、ほぼ同じ時刻に重なっているこの偶然に唖然としてしまった。最初から時刻が分かっていれば、全員に説明して現場で時刻を確認して撮影もできただろう。

サンノゼ空港からスタートし、昼飯を食い、国府田農場に立ち寄り、途中いくらかアクセルを踏み込みスピードを上げて走ってきた。サンノゼからおよそ５時間と少し、とても時間計算して走れる距離ではない。アンセルが撮影した年から 72 年後の同じ場所、同じ時間に撮影したこの偶然に、長年アンセル・アダムスに拘ってきた熱意がアンセルに少し通じたのかもしれないと思った。

1854 年はペリーが浦賀に再び訪れ開港を迫り、日米和親条約（神奈川条約）が結ばれた年に当たる。時代も嘉永から安政に変わり、日英和親条約、日露、日仏、日蘭和親条約が立て続けに結ばれ、諸外国の文化が一気に入り込んでくる時代へと大きく舵を切った年でもある。

実は、この年、ペリー艦隊は従軍写真家を連れてきていた。名前は**エリファレット・ブラウン・ジュニア**といい、琉球、下田、函館、横浜と上陸し、風景、建築、人物のダゲレオ・タイプ写真を撮っている。その作品の多くが「ペリー提督日本遠征記」の木版、石版の原画として使用された。**1854 年は日本で写真が撮られた最初の年にあたる。**

日本では、**6 月 1 日が写真の日**になっている。これは、1857 年（安政 4 年）6 月 1 日、島津藩士・一来四郎が薩摩藩主・島津斉彬をダゲレオ・タイプで撮影したとなっている。

ヨセミテ雑感

～祖父･吉田博との思い出とアンセル･アダムス～

吉田隆志（写真家(博の孫)）

「十人写生旅行」

私の祖父で木版画・洋画家の吉田博が明治 44 年（1911 年）に著出した『十人写生旅行』（興文社刊）という本を読んだ。博は今から 100 年以上前、ライバルであった画人・黒田清輝をリーダーとする政界に縁の深い「白馬会」に対抗し、在野精神旺盛な「明治美術会」のグループに属していた。のちに日本画壇の将来やアメリカとの関係を考え「太平洋画会」を結成、わが国の洋画壇に二大派閥ができたのがこの頃だ。

そしてさらなる活躍の場を求めた博は、妻・ふじを伴い、足かけ五年の長きにわたりアメリカからヨーロッパ、アフリカへの写生旅行をおこなった。その経験をいかし「太平洋画会」の風景画作品の発展を願い、その後はグループで写生旅行を続けていくようになった。のちに瀬戸内海の島々をまわるために船をチャーターすることもあったと言う。 これが著書のタイトル『十人写生旅行』の来歴だ。

その旅は、博をはじめ中村不折、満谷国四郎、鹿子木孟郎、石川寅治、小杉未醒（放庵）、石井柏亭、中川八郎、高村真夫、木下藤次郎といった、のちの日本画壇を担う蒼々たる面々が参加している。それは、スケッチ・ブック片手に気軽に出かける旅ではなく、重い木製のイーゼルや大きなキャンバスを何枚も携え、山登りに行くようなスタイルの写生旅行だったと言う。皆一緒に旅をしながらも、絶景を見つけるや、参加者全員が思い思いの構図を見つけては、スケッチ・ブックに描いたリ、キャンバスに油絵を描くといった『十人十色』の写生旅行だったようだ。

「ゾーン･システム研究会」

ところで今年 5 月、私はヨセミテ国立公園を訪ねた。標高数千メートルのシエラネバダ山脈では、残雪のヨセミテ渓谷が撮影できるかと期待していたが、渓谷はすでに日本の春のような陽気でハナミズキが満開、雪解けの滝は例年にない水量の多さで、中でも上下二段の滝として知られるヨセミテ滝は、ひと際大きな水しぶきを入道雲のように上げていた。氷河時代より自然が育んだ巨大な渓谷の花崗岩は、いつもは乾燥しているのに、今回はそこに無数の滝を見つけることができた。

今回のヨセミテ国立公園の旅は、リーダーで写真家・中島秀雄氏率いる「ゾーン・システム研究会」という写真研究会会員有志 10 名と、私の総勢 12 名のメンバー。国立公園へ入りやすいカリフォルニア州・サンノゼ市の空港から 3 台のワンボックスカーをレンタルした旅だ。

「ゾーン・システム」とは、ヨセミテ国立公園の自然をこよなく愛した米国の写真家・アンセル・アダムスの構築した写真技術の名前だ。このことにはのちほど触れることにしよう。

さて、このゾーン・システム研究会一行との旅は、まるで祖父・博の時代の『十人写生旅行』を思わせる旅だった。ただひとつ異なるのは、彼らのバッグパックにくくりつけているのはカメラを載せる三脚であり、当時祖父たちがキャンバスを乗せていたイーゼルではない、ということぐらいだった。何枚ものキャンバスの代わりに、彼らはいま、何枚ものシート・フィルムをたくさん携えているのだ。

重い三脚に古式の木製暗箱の様なカメラを載せ、黒い布をかぶって逆さに見えるピント・グラスを覗き込みながら、各自思い思いの作品を撮影

吉田博氏制作

吉田隆志氏撮影

している風景を見ていたら、私にはますます『十人写生旅行』の時代の祖父一行と、今回の彼らのイメージが重なって見えてきた。中島氏にアングルや露出などのアドバイスを受ける研究会のメンバー10 名の顔が、当時の「太平洋画会」のメンバーの面々に見えてくるのであった。

注）一部、財団法人国立公園協会の「国立公園」誌より転載。

吉田隆志氏・略歴

（株）プランズ代表取締役
（株）日本フォト・リサーチ・センター（JPRC）専務取締役
写真家
（社）日本写真家協会（JPS）会員、
（社）日本広告写真家協会（APA）会員、
（社）日米協会（AJS）評議員、
新写真派協会（SPA）会員、
アメリカ学会会員、
著作権法学会会員、
国際浮世絵学会会員
WBCCI 米国ワーリーパイアム・キャラバン・クラブ・インターナショナル会員

経歴

1942 年 東京・下落合に生まれる。
1961 年 東京都立新宿高校卒業。
1966 年 日本大学芸術学部写真学科を卒業。翌 1967 年にアメリカ撮影取材旅行を開始。
以来、毎年数回アメリカへ長期取材旅行。これまでに全米 50 州、 合計 25 万キロ以上を走破、撮影。同時にメキシコ、カナダ、アフリカ、イギリス、セイシェルなどへも 撮影取材旅行。
1975 年 「吉田隆志フォト・ライブラリー」開設
1980 年 『ナショナル・ジオグラフィック』誌をはじめと多数の海外メディアでも発表開始。
1981 年 欧州 6 ヶ国取材（オランダ、ベルギー、フランス、イタリア、スイス、ドイツ）。
1982 年 株式会社プランズ及び「アメリカン・フォト・ライブラリー」を開設。

1983 年 アセアン取材（インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイ、フィリピン)。
この後もアメリカ以外にも、東アフリカ、ヨーロッパ諸国、インド等の取材多数。
1986 年 ＪＰＲＣ、日本フォト・リサーチ・センター設立に参画。 レーザーディスクを利用した８万点の写真のデータベース化に取り組む。
1999 年 キヤノン株式会社のインターネット･サイトのためにオンライン・フォト・エージェンシー「CHROMADEX」(クロマデックス)を共同で開発。
2002 年 （株）プランズ内のサーバーに上記 CHROMADEX を移転、APL online とする。
2003 年 APL online は、２０万点を越える写真を検索出来る国内有数の 写真著作権販売サイトとし、㈱プランズの写真販売の 90%をオンライン化に成功。

写真集

1992 年 「アメリカ深南部フォト・ストーリー」グラフィック社刊
1992 年 「アメリカ南部フォト･ストーリー」 グラフィック社刊
1992 年 「アメリカ北東部フォト・ストーリー」グラフィック社刊
1992 年 「アメリカ中西部フォト・ストーリー」グラフィック社刊
1992 年 「アメリカ西部フォト･ストーリー」 グラフィック社刊
1993 年 「アメリカ西海岸フォト・ストーリー」グラフィック社刊

著書

1981 年 「アメリカ・ドライブ全ガイド」JTB 出版・刊
1986 年 「ウエストコースト・ドライブ」 三修社・刊
1987 年 「アメリカドライブガイド」JTB 出版・刊
1989 年 「アメリカン・キャンピング」辰巳出版・刊（キャンピングカー総合ガイド)
1991 年 「ドライビング・アメリカ」ジャパン・タイムス社・刊（全米 50 州のエッセイ)
1993 年 「風と共に去りぬ」求龍堂・刊（撮影・越智道雄氏・共著)

新聞・雑誌

1980 年 海外では、前記アメリカの「ナショナル・ジオグラフィック」誌の アサイメントを始め、国内では、ほとんどの日本国内の新聞・雑誌など有名紙誌多数掲載。
1981 年 以来毎月毎月の様に NHK 出版局の英語関連出版物に連載。

写真展・個展

1973 年 「キャンピング・アメリカ」玉川高島屋ショッピングセンター特設会場。
1984 年 「全和蘭街道アラウンド・オランダ」有楽町フジフォトサロン全会場。
1988 年 「アメリカ 50 州取材開始 20 周年・吉田隆志写真展」
後援：米国商務省観光局 ワールド・トラベルフェアー内特設ギャラリー。
1991 年 「全米 50 州 50 景」 京橋 Gallery Hiro & Y(YS ビル２階)ギャラリー
1992 年 「全米 50 州 50 景」 アメリカン・クラブ・玄関ギャラリー

写真・美術展・企画

1999 年 「アンセル・アダムスの世界」展を、アダムス家協力のもと、

読売新聞社、美術館連絡協議会、他の主催・協力により、日本橋三越特設会場、愛媛県美術館、砺波市美術館、北海道立釧路芸術館、川崎市民ミュージアム等で巡回展等を、企画・監修。

2002 年 米国ミネアポリス市美術館企画展　「日本の伝説・吉田ファミリー４代の 芸術家」を企画・協力。

ＴＶ、ラジオ番組出演、講演等

・ NTV「金原二郎ショー吉田隆志のアメリカ旅特別番組」出演

NTV「11PM」にアメリカ取材多数出演

・フジテレビ「３時のあなた」アメリカへ扇千景をキヤンピングカーに取材ご招待

・NET「アメリカ、キヤンピングカーの旅」出演

・NTV「各州紹介スペシャル・６回シリーズ番組」

・NTV のビデオ・ライブラリーの制作

・TBS「新世界紀行」(一万人コーディネイター)出演

・文化放送「百万人の英語」出演

・中国放送「マツダ・ミュージック・ドライブ」連続ラジオ番組にレギュラー出演

・NHK 国際放送出演

・1979 年 アメリカ南部文化学会講演　国際文化会館 「ルイジアナのプランテーション・ホーム」(英語)

・1983 年 アメリカ南部文化学会講演　国際文化会館 「ミッシシッピ-川、メキシコ湾から源流のアイタスカ湖まで」(英語)

・1989 年 上智大学　アメリカ・カナダ研究所にて講演 「見つめてきた２０年のアメリカ」

・1993 年 JTB ワールド西日本　大阪・御堂会館・大ホールで講演とスライド 「大都市だけがアメリカじゃない」

・1999 年 TV 神奈川など「アメリカ国立公園紹介６回シリーズ番組」出演

・2000 年「海外の展覧会に見る吉田博(1876-1950)」

その他

吉田博府中市美術館「吉田ふじを展」図録にエッセイ「祖母の面影、私の見た吉田ふじを(1887－1987)」執筆

築地仁氏講演会

～写真を撮ること･見ること･つくること～

荒井崇

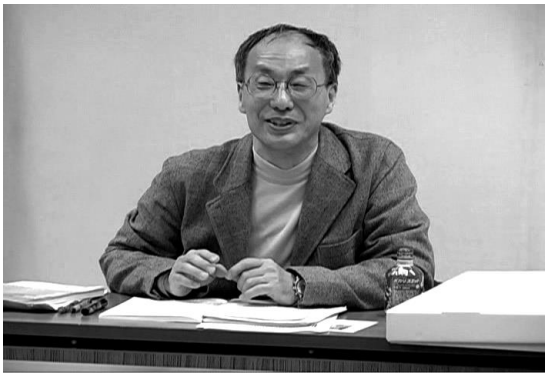
・日時：2006年2月25日（土）15～17時
・会場：横浜市市民活動支援センター会議室

2006 年ゾーンシステム研究会総会後、恒例の講演会が行われた。今年は、写真家の築地仁氏をお招きし、講演していただいた。

築地さんは現在、頻繁に個展を開催して積極的な作品の発表を続けている写真家だ。また同時に、日本写真芸術専門学校の講師としても活躍されており、多くの若い写真家を育成されている。

築地さんは今も９８％は銀塩写真を使用するとのこと。「世の中はデジタル写真への変わり目で、銀塩写真が窮地に陥っている。しかし銀塩写真にとって今が一番良いときだ。なぜならデジタルが完成すると再度銀塩写真が見直される。」と築地さんは言う。

築地さんが写真家を志したのは、中学時代に出会った美術の先生の影響だ。美術の時間にみんなで写真を撮影したときの経験が事の発端。撮影した写真がみんな異なるものだった。「どうしてこ



んなにもみんなの見る目は違うんだろう。」と感じたそうである。

そして写真に興味を抱いた築地さんに美術の先生は、「写真は一から勉強できるからおもしろい。ぜひやりなさい。」と言って、写真に関する本を築地さんに見せてくれた。この本、実はアメリカの本で文章は全て英語、確かに一から勉強できる本であったがわからない。くやしかったので後に工芸大へ進学したとのこと。

築地さんの写真に関する持論はかなり明快だ。

写真はまず以下３つの基本【撮ること】【見ること】【つくること】が重要。撮ることだけを考えている人が多いが、技法の重要性、みることの重要性をもっと認識して欲しいと言う。

更に築地さんは、写真を【選択の芸術】と称している。どんなフィルムや印画紙を使うか。どんなフレーミングをするか。どんな薬品を使うか。コンタクトプリントからどれを選ぶか。など、ポイントは確かに選択だ。

そして【公開すること】。以前、学生に暗室作業を教える際、ネガを貸せと言って、築地さんがうまく焼いて見せたという。やって見せてその中から方法を盗めと言いたかったのである。しかしその後、学生はモノクロ写真が上達することは無かったと言う。築地さんは、それを失敗したと思

っているそうだ。写真に関してだけは盗むことはできない。１から手法を教えてもらうしかない。「とにかくわからないことは人に聞け。」「教えてくれない人は心が狭いと思え。」というのが築地さんの方法論である。
その後築地さんは、必ず技法等は公開し、意見交換するようにしているそうだ。

最後に写真は、常に【生まれ変わる（一歩進む）】ことが重要だとのこと。毎日一歩一歩写真を撮っていく。撮りたいと思うこと。次に何を撮ろうかと思って新しい被写体にカメラを向けること。（そして写真をつくる過程も含めて）これがまさに生まれ変わるということであると言う。

今回築地さんは、日本の写真界についていくつか提言をしていた。

・日本における美術館の学芸員は写真専門の人が少ない。写真の使い方がへたである。
・木村伊兵衛賞作家は写真というメディアを利用しているだけで、写真そのものを好きな人が少ない。
・若い人は、写真の被写体がおもしろいと感じている人は多いが、写真を物としておもしろいと思う人が少ない。
・日本は、「写真はだれにでも撮れる。」と思っている。アメリカは、「写真は国の宝である。」と思っている。

要するに築地さんは、「もっと写真というもの全てを愛して欲しい。」ということを言いたかったのではないだろうか。

築地さんは以前美術館で、アダムスのプリント「波の連作(Surf sequence)」を見たとき、「こんな撮り方があったのか。」と大変感動したそうである。このときばかりは、本当に「盗りたい！」と思ったそうである。そういった写真そのものに対する感動、愛する心が築地さんの作品制作を推し進める原動力であるに違いない。オリジナルプリントというものを大切にするゾーンシステム研究会の理念と、大変近いものを感じた次第である。

最後に、築地さんのオリジナルプリントを多数見せていただいた。
スチルライフからスナップまで幅広いモノクロ作品。いずれも抜群の構成力と、作品からかもし出す大きなエネルギーを感じた。

写真に取り組む姿勢を改めて考えさせられた、大変有意義な講演会であった。

●築地仁氏略歴

1947 年 神奈川県に生まれる

1979 年 島尾伸三、金子隆一らと CAMERA WORKS の活動を開始

・1979～95 年 写真同人誌「camera works tokyo」を企画、編集、発行

・1985 年 日本写真協会新人賞を写真集「写真像」で受賞

・1997～98 年 「アサヒカメラ」誌で「クラシックレンズ・コンテスト」を選評

・2005 年～ 日本写真芸術専門学校 講師

作品は、東京都写真美術館、川崎市民ミュージアム、東京国立近代美術館、東京工芸大学写大ギャラリー、米プリンストン大学美術館などに収蔵

●主な展示会歴

・1977 年 "方向量" フォトギャラリープリズム(東京)

・1984 年 "母型都市" ポラロイドギャラリー（東京)

"写真像" ツァイトフォトサロン（東京)

・1987 年 "写真像 1984-1986" ピクチャーフォトスペース、都ギャラリー（大阪)

・1992 年 "築地仁写真 1992-1984" ピクチャーフォトスペース（大阪)

・1993 年 "単子 MONADE" ツァイトフォトサロン（東京)

"単子Ⅱ MONADEⅡ" ピクチャーフォトスペース（大阪)

・1995 年 "モノ・カオ・反物語" 東京都写真美術館

・1997 年 "空巣都市-Kusoutoshi"/ The Third Gallery Aya (大阪)

・1998 年 "築地仁の現在<なぜ?いま?ここに>1974～1998" 東京工芸大学写大ギャラリー

・2002 年 "都市の境界 Motherpolis End" ギャラリーアートグラフ（東京)

・2003 年 "3 人展 掌の宇宙" DAZZLE (東京)

"Still Life <e,j et je 築地仁＋橋本恵美子>" ポラロイドギャラリー(東京)

"垂直状の、(領域)・03" DAZZLE (東京)

・2004 年 "垂直状の、(領域)・04" DAZZLE（東京)

・2005 年 "水平彷徨" ギャルリ ドゥミ・ソメーユ（東京)

・"垂直状の、(領域)・05" DAZZLE (東京)

デジタルコンタクトプリントの実験

畑文夫

2006 年 3 月 11 日例会のプレゼンテーションは、研究会会員である畑さんによる、デジタルコンタクトプリントの解説が行われた。

デジタルコンタクトプリントとは、フィルムをパソコンでスキャンして画像処理を行い、透明なフィルムにプリントアウトしてネガを作成するものである。

プリンタによる低解像度画質なので、密着が前提。引き伸ばしはできない。しかし、プラチナプリントや画像処理を行いたい作品にとっては好都合である。

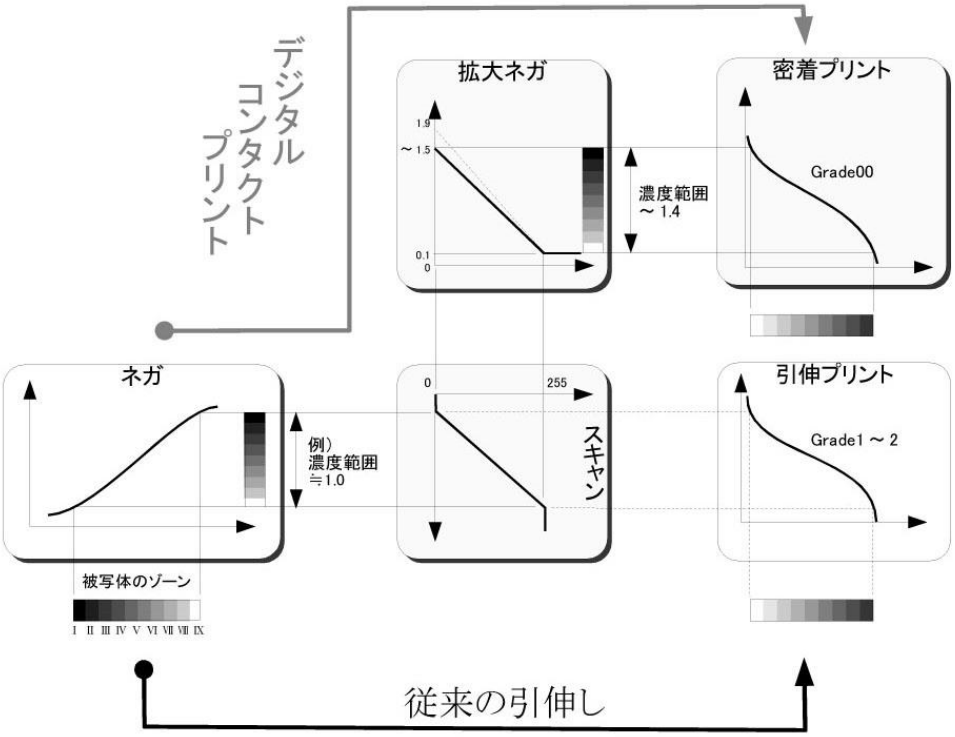
今回は、プレゼンテーションの際の資料を掲載させていただいた。興味のある方で更に詳細を知りたい方は、畑さんに問い合わせていただきたい。

Digital Contact Print　概要　1

大判カメラで撮影し、現像したネガをスキャナーで読み取り、パソコンで画像処理してからインクジェットで透明フィルムにプリントする。

こうして作成した「拡大ネガ」を印画紙に密着焼きする。

Digital Contact Print　概要　2



Digital Contact Print　メリット／デメリット

●　デジタル画像処理を行うことのメリット

- 精密なプリントイメージの調整が可能になる。
  樹の枝など、細かい部分も焼き込み、覆い焼きが行える。
- パソコンの画面で仕上りを確認できる。（ポストビジュアライズ）
  モニターで気に入るまで試行錯誤を行ってから本番のプリントを行える。
- ゴミ、キズのレタッチが容易
  とくに画面に黒く現れるゴミ(フィルムにゴミがついた状態で撮影した場合など)のレタッチも容易。
- 技法の発展、表現の拡張
  カラーポジからモノクロ変換、そのほか自由なイメージの展開が可能になる

◆　デジタル処理を途中に入れることのデメリット

- 初期投資がかさむ。（パソコン，スキャナ，プリンタ，ソフト，etc）
  パソコンのメモリーは最低でも1GBは必要
  ソフトはフォトショップCS以上が不可欠
- ランニングコストもかさむ（インクジェット用フィルム、インク）
- プリントサイズの制約
  バキュームイーゼルなど、特殊な道具が必要になる。

Digital Contact Print　キーとなる材料・機材

・ 拡大ネガ用フィルム

ピクトリコ　製版フィルム　タイプ S
顔料インクジェット用　17 インチ幅 ×20m ロール　18,900 円

・ インクジェットプリンタ

エプソン PX5500
顔料プリンタ　　最大Ａ３ノビ（半切より若干小さい）

・ フィルムスキャナ

４ × 5以上のネガを 2800dpi 以上で読めるもの
（カタログの解像度は「話半分」と思うこと）

Digital Contact Print　フィルムのスキャン

- スキャン解像度＝拡大率 ×720dpi

拡大ネガの解像度が 720dpi 以上になるようにオリジナルネガのスキャン解像度を設定する。

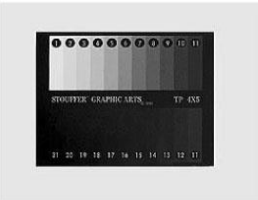
例）４ × 5ネガを 2800dpi でスキャン　→　14 × 17拡大ネガは 720dpi
　　拡大率3．5倍　→　解像度1／3．5倍

- モノクロネガも 48 ビット RGB で「ポジ」としてスキャン　（勉強中）

画像処理でグレースケールに変換　→　パソコンのメモリに余裕がないと厳しい！

- ステップタブレット(注)を同時にスキャンして、濃度を確認
- フォトショップ形式でデータ保存　（ JPEG は不可）

注）ステップタブレット:　濃度を段階的に記録したフィルム。 今回は4 × 5サイズで濃度 0.1 から 3.0 まで、0.1 刻みのものを入手した。 アメリカ　Stouffer 製。



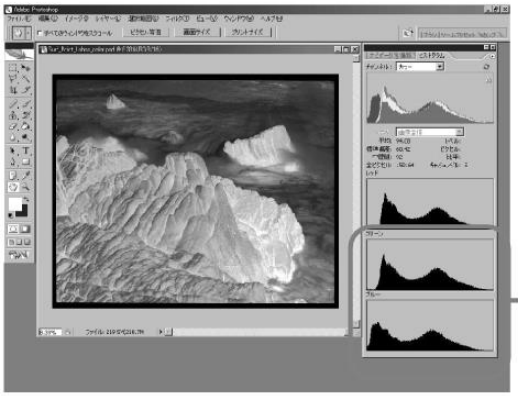
Digital Contact Print　画像処理

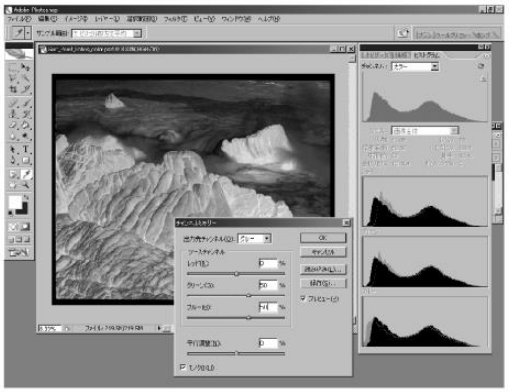
- Adobe Photoshop CS 以上が事実上の標準
- メモリーとハードディスクは多いほど良い！
  例)　720dpi　8×10 サイズ画像　→　220MB
- ペンタブレットも必須　(春日氏の Tips)

Digital Contact Print　画像処理

- 「チャンネルミックス」でカラーからグレースケールへ変換

勉強中

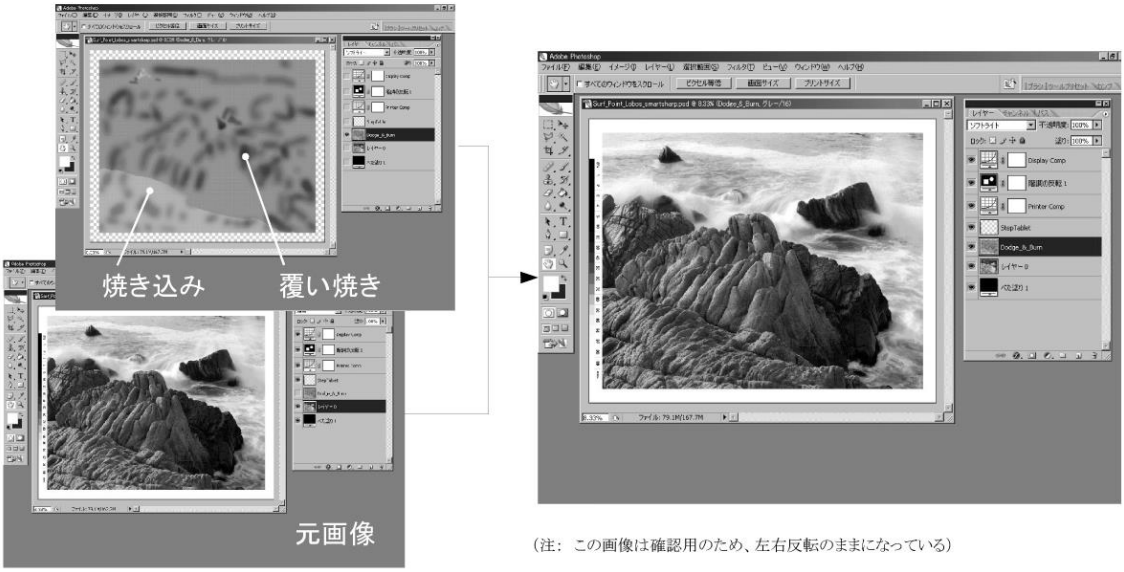




(注：ネガは左右反転でスキャンする)

Digital Contact Print　画像処理

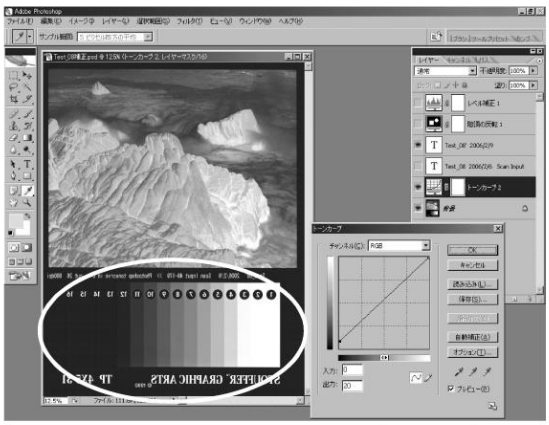
焼き込み、覆い焼きなどの調整にはフォトショップの「レイヤー」を使用する。　元の画像には手を加えないことが大切。

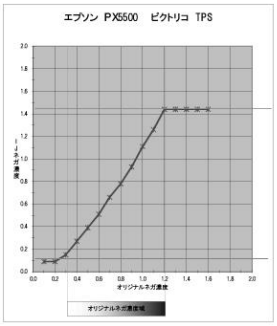


（注：この画像は確認用のため、左右反転のままになっている）

Digital Contact Print　インクジェット　拡大ネガ

ステップタブレットを参考にしてプリンタの出力レベルを調整する。



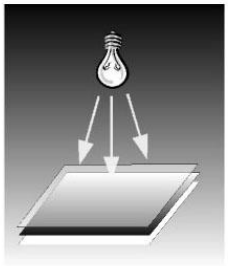


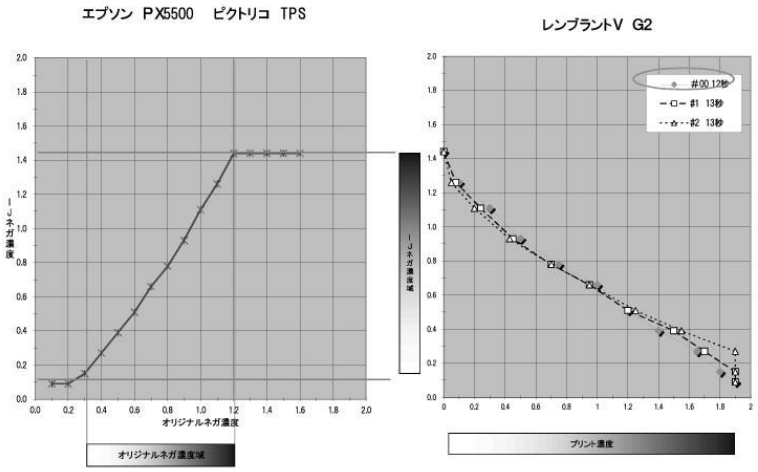
（注：ネガは左右反転のままインクジェットで出力する。密着焼きで正像となる）

Digital Contact Print　密着プリント　拡大ネガの濃度

拡大したステップタブレットをレンブラントＶ G2 に密着プリントしたところ、この印画紙で再現できるのは濃度で約 1.4 の範囲であった。
（ベース濃度は約 0.1 ）

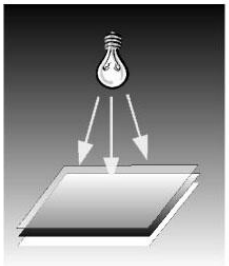
このため、拡大ネガの濃度がこの範囲に収まるようにフォトショップの「トーンカーブ」を設定する。

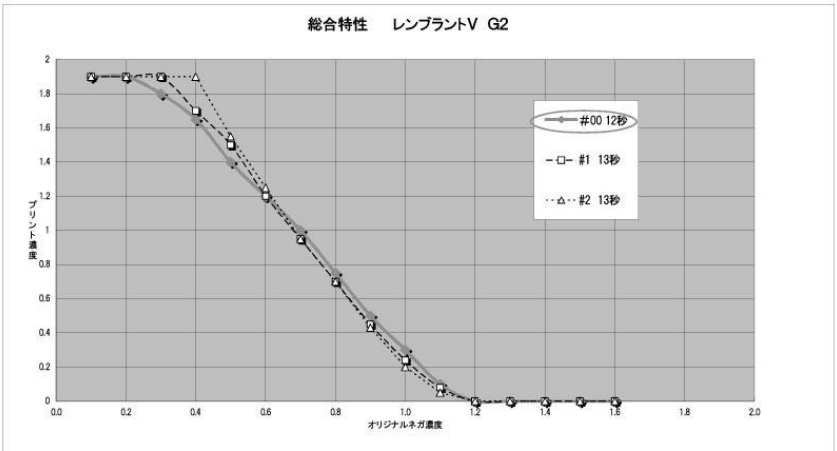




Digital Contact Print　密着プリント　印画紙の号数

VCフィルター 00 号を前提に拡大ネガの濃度を調整したが、最終的には得られたプリントにより号数フィルターを微調整する。





Digital Contact Print

今後の課題

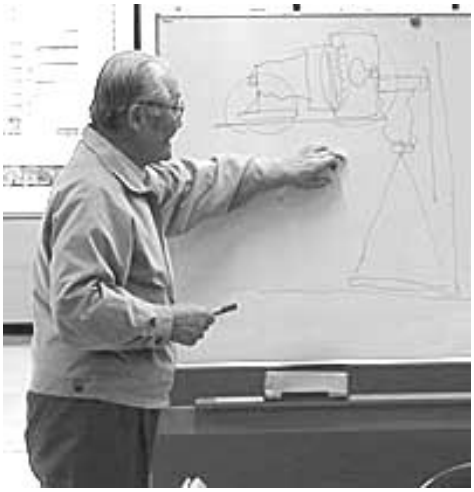
- フィルムの浮き対策　→　バキュームイーゼル必要？
- モニターのキャリブレーション
- プリント観察の光源（色温度、照度）最適化

etc

参考）スキャナーを濃度計として使用する

- スキャナーを透過／反射の簡易濃度計として利用できる。
- ネガとステップタブレット、プリントとグレースケールを同時スキャンし、Photoshop などでデータ測定。

ゾーンシステム研究会定例会日誌



2006年2月25日（土）

横浜市市民活動支援センター会議室

・出席者：中島先生、菅野、古川、畑、松本、小野、荒井、田中肇、古谷津、山本、宇野、古川、木下、石井、宮岡、佐野、岡崎、北野、橘田、長谷川、浜野、池田、宮内、鷲尾、佐久間、鈴木匡、内山

・作品持参者：内山

ゾーンシステム研究会総会　13:00-15:00

議事

・議長に北野氏を選出

・2005 年度の会計報告を承認

・2006 年度の活動計画と予算案を承認

・幹事の交替を承認

・退任：田中肇氏　　選任：北野龍一氏

・総会後、築地仁氏レクチャー

2006年3月18日（土）

横浜市市民活動支援センター会議室

・　**出席者**：宇野、松本、菅野、山本、小野、北野、橘田、石井、越後、畑

　見学：小菅

・作品持参者：松本、小野、北野、小菅

・名古屋ボストン美術館　アダムス展見学とリトルワールド撮影会

・３月２５～２６日　７人参加予定

・春日広隆氏スタジオ（伊豆高原）訪問の報告

・ワークショップの計画

未受講の会員（５名）対象、外部からも募集する

・４月から　合計６回程度。　詳細日程は対象者と相談する。

・ホームページに「Ｗｅｂワークショップ（仮称）」も開設したい。

・セミテ撮影会の詳細　（７日間の参加も可）

・ホームページ用作品募集

・例会で講評済み、或いは過去の写真展に展示済みの作品。最大８×１０以内のプリントと作者コメントを畑まで送付願う。

・写真展準備：例会で中島先生のチェックを受けた作品（８×１０プリント）を、各自がファイルして保管すること。１５点ストックを目標）

・プレゼンテーション（第１回）

手作り引伸ばし機とカメラ（宇野氏）

材料や工作方法のノウハウあり、自作したい方はぜひ相談ください。

・作品講評

2006年4月8日（土）

横浜市市民活動支援センター会議室

・出席者：古川、小野、松本、荒井、古谷津、北野、橘田、岡崎、木下、圓子、鈴木、越後、小菅、畑

・作品持参者：小野、古谷津、北野、橘田、岡崎

・本日朝９時から、横浜大桟橋で自由参加の撮影会を実施した。今後も随時行いたい。（圓子、橘田、古谷津）
・ゾーンステムワークショップ
４月５日から開始。内山、越後の二人が参加。ゴールデンウィークを利用して、他のメンバーも参加できるようにしたい。
・名古屋アンセルアダムス展見学とリトルワールド撮影会を実施。
・ヨセミテ撮影ツアー事前説明会：４月２２日鎌倉にて
→　参加者に若干の余裕あり。　１週間のみの参加も可。
・希望者は申し出てください。（会員以外でも可）
・プレゼンテーション（第２回）
「デジタル・コンタクト・プリントの実験」（畑氏）
・作品講評

2006年5月13日（土）
横浜市市民活動支援センター会議室
・出席者：管野、古川、山本、宇野、小野、松本、古谷津、田中英、本田、佐野、篠原、石井、橘田、岡崎、木下、圓子、長谷川、鷲尾、内山、鈴木匡、小菅、山下、畑
・作品持参者：松本、古谷津、本田、佐野、岡崎、鈴木匡、小菅

・アサヒカメラ編集部　宮野さんが研究会の例会を取材（６月２０日発売の７月号に掲載）
・プレゼンテーション（第３回）
８×１０光源の作成　（古谷津氏）

2006年6月17日（土）
横浜市市民活動支援センター会議室
・出席者：圓子、本田、北野、石井、古谷津、橘田、岡崎、木下、松本、荒井、宇野、田中肇、宮岡、山本、古川、小野
ゲスト：吉田隆志氏
・作品持参者：圓子、本田、北野、石井、古谷津、橘田、岡崎、木下、松本

・ヨセミテ撮影ツアーのスライドショー
・撮影会について
６月撮影会は希望者が集まらずキャンセルとなった。
・暗室ワークは８月に工芸大（中野坂上）で実施予定。詳細は決定しだい連絡。
・名古屋ボストン美術館でエドワード・ウェストン展開催。（８月２７日まで）鑑賞ツアーを予定。
・作品講評

2006年7月8日（土）
横浜市市民活動支援センター会議室
・出席者：石川、小菅、圓子、石井、橘田、岡崎※、越後、宇野、山本、山下、鷲尾、鈴木武士、鈴木匡、菅野、古川、松本、北野、畑
ゲスト：　吉田隆志氏

・**作品持参者**：石川、小菅、圓子、石井、橘田、岡崎、越後、松本、北野、畑

・写真展候補作品が未定の方は、プリント作りを急いでください。
・名古屋ボストン美術館　エドワード・ウェストン展鑑賞会
７月２３日（日）１２時美術館前（金山駅）に集合
その後愛知県美術館の東松照明展も鑑賞予定。
・静物撮影会　８月１６日（水）　９時～
横浜市民活動支援センター　４階会議室
詳細は８月５日の例会にて
・暗室ワーク　　９月初旬で調整中
・プレゼンテーション（第４回）
ヨセミテのアダムスギャラリーで購入した写真の説明：

2006年8月5日（土）
横浜市市民活動支援センター会議室
・**出席者**：小野、古谷津、圓子、石井、北野、畑、荒井、小菅、越後、宇野、山本、鷲尾、松本
・**作品持参者**：小野、古谷津、圓子、石井、北野、畑

・プレゼンテーション（第５回）
プリントの保存（荒井氏）
・静物撮影会　参加者募集
日時：８月１６日（水）９時～１７時半
場所：横浜市民活動支援センター４階会議室
テーマは「形態美の追及」
主な題材：建築金具、野菜（参加者が分担して持ち寄る）
・モノクロ写真感材に関するセミナー
日時：９月１６、３０日、１０月７、２１日の４回（いずれも土曜１８時半～２１時半）
場所：銀座コダックフォトサロン会議室
参加費：教材実費程度
元コダックフォトサロン井本氏のご好意で、モノクロフィルム、印画紙の特性曲線の見方・活用法、画像の修正、アーカイバル処理などについてレクチャーをして頂きます。
定員２０名程度。
・暗室ワーク：日程調整中
候補日：９月２日（土）、３日（日）、１０日（日）のいずれか。
場所：工芸大学（中野坂上）暗室
テーマは「半切プリントへチャレンジ」
次回の例会以前になる可能性もあります。
・作品講評

Information

【トピックス】

1. 春日氏アトリエ訪問（2006.4.8）

デジタルモノクロプリントを実践している写真家、春日広隆氏のアトリエ（伊豆高原）を訪問した。今回は、役員の有志数人によるものであり、研究会の調査という意味で行われた。

春日広隆氏によるデジタルモノクロプリントの詳細については、畑氏の記事（no.31）を参照していただきたい。

今回驚いたのは、フィルムスキャナーである。高価な海外製のスキャナーを使用されている。フィルムスキャナーは非常に重要で、安価なスキャナーで高品位プリントはむずかしいとのこと。

将来プリンターでの作品作りは広まると思われる。感想として、やはり銀塩独特のトーンとの違いは残るのではないかと思った。機材が入手できる限り、銀塩も並行して続けるべきだと考える。

2. ゾーンシステムワークショップ（2006.4-5）

４月から５月にかけて、会員のためのゾーンシステムワークショップが開かれた。

・場所：田中英司氏アトリエ（反町）

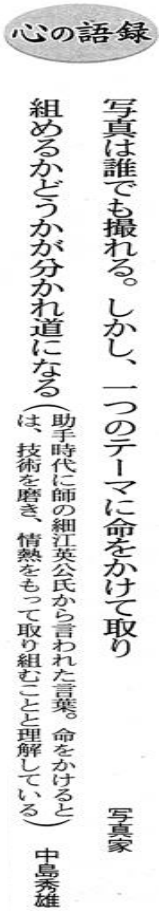
・参加者：内山氏、越後氏、鷲尾氏、小菅氏、鈴木匡氏

3. 名古屋ボストン美術館アダムス展見学（2006.3.25-26）

名古屋ボストン美術館アダムス展見学、及びリトルワールド撮影会が行われた。アダムス展は、従来日本に紹介されなかったアダムスの若き日の作品（インディアンの写真等）が多く展示され、名古屋まで行く価値の在る、すばらしい展覧会であった。（表紙写真参照）

4. 中島先生語録「心の語録」に掲載

中島先生関連の記事が、東京新聞に掲載されました。（2006.5.23 朝刊）


心の語録

写真は誰でも撮れる。しかし、一つのテーマに命をかけて取り組めるかどうかが分かれ道になる（助手時代に師の細江英公氏から言われた言葉。命をかけるとは、技術を磨き、情熱をもって取り組むことと理解している）

写真家 中島秀雄

【売ります】

中島秀雄

・印画紙

New Seagull GF-2 FB　11x14　50 枚（未使用）

７０００円（定価１２２６４円）

・ニッコール 210mmF5.6 (AB+)

３５０００円

・ベッサ6×9 カラースコパー105mm F3.5

６００００円

・エンビ組み立て流しは売却済。

Information

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）

・パソコンの電子メール

・ウィンドウズの Word2000-2003

・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2003 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

［編集部］　荒井　崇